

行基と土塔

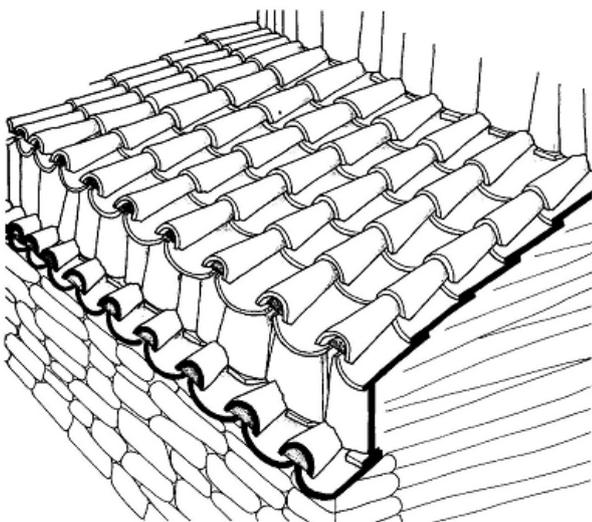
大阪府堺市土塔町・大野寺・土塔

土塔は、奈良時代に大野寺に築かれた仏塔である。大野寺は行基が建立したとされる四十九院のひとつで、行基年譜には「聖武天皇四年神亀五年」に起工したと記されている。この土塔に関する詳しい文献は残されていないが、鎌倉時代に描かれた『行基菩薩行状絵伝』(重文)に本堂、門、と共に「十三重土塔」と記されている。大野寺土塔は調査の結果一辺53.1mの基壇が存在し、その上に一層から12層(一辺11.3m)までの土塔が方墳状に積み上げられていた。絵伝によれば塔の頂上には宝珠と露盤が表現されているが、現在は残っていない。昭和27年頃、土取りによって北東約1/4が削り取られていた。昭和28年に史料の記述どおりとして、国の史跡に指定された。平成10年度から14年度まで復元整備を目的とした発掘調査が行われ、平成21年4月に復元整備が終わった。



昭和27年当時の土塔

土塔の初層から12層の屋根に相当する部分は本瓦葺であった。各層の立面には土の崩壊を防ぐため立て瓦を立てていた。現在修復された土塔は2面のみが瓦葺である。経費の関係で当初の通りの復元は今となってはやむを得なかったのか。



土塔瓦葺復元イラスト(堺市教育委員会)

前面を瓦で覆った土塔は、堺市教育委員会の推計では本葺き瓦;61,432枚、立瓦;6,440枚、基壇の瓦9,704枚を合計すると7万枚を超える瓦が必要となる。これらの瓦は土塔の北西約170m離れた丘陵の斜面で焼かれ、窯跡は平窯で新旧2基が重なっていた。

土塔瓦の中に文字瓦が1,300枚以上見つかっており、その93%が人名瓦である。これらの中には「蓮光」などの僧侶名、「善智尼」などの尼僧名、「優婆塞」という在家の信者、「矢田部連龍麻呂」などの豪族、「花女」や「江自父母」など女性の寄進したと思われるもなど幅広く多くの人が関わった事が窺がえる。

堺市市長公室 白神典之氏の調査考察

- ・ 十三重塔であることが、粘土塊の列により確認された。
- ・ 一辺が53.1mで（当時の天平尺で180尺）あることが、瓦積基壇縁辺の位置から判明した。
- ・ 頂部の構造を知る手がかりはなかった。円形に回る13層目の粘土塊列から円形の構造、あるいは八角形の構造物が推定された。
- ・ 舍利が有ったかどうかは直接の手がかりは無かった。中心部の掘削調査では4.5mまで掘り下げたが底が見つからなかった。盗掘跡を埋めた土の中から白色凝灰岩の破片があったが、小さい破片であり詳しいことは分からなかった。地中レーダーによる探査でも芯礎は見つからなかった。
- ・ 願文を記した須恵器を復元すると梵鐘に似た最大37cm、高さ30cm程度であり、頂部を飾る伏せ鉢にしては小さいように思われる。
- ・ 土塔の築造年数は出土した瓦の大半が奈良時代前期の特徴を示すことや「神亀四年二月」を示す文字瓦の存在から『行基年譜』にある「神亀五年」は錯誤で「四年」以下「二月三日」に工事が始まったと考えられる。
- ・ 使用瓦は7万枚以上となり周辺はもとより泉北地域でも焼かれたと考えられる。
- ・ 文字瓦は1300点以上が確認されており、その96%以上が人名である。
- ・ 粘土塊を使用した盛り土はこの土塔の土木技術を非常に特徴づけている。この粘土塊の列が各層の前面にあり、古墳や池の堤防などでも類似の施工例がある。狭山池などでも使われていて、効率的に強固な盛り土を行う為のものと考えられる。粘土塊の間を埋める水平の盛り土は基壇の盛り土の版築を簡単にしたようにも思われる。
- ・ 土塔として作られた事の意義は、木造塔の様な高度な専門技術を要さずに、大勢の人が参加でき、仕事を分担して作ることが出来た事に在ると思われる。



出土 人名瓦



平成21年5月 整備完成



完成後の頂上より（1/2面のみ瓦葺）



他の土塔について

・奈良県奈良市高畑町・頭塔（ずとう）

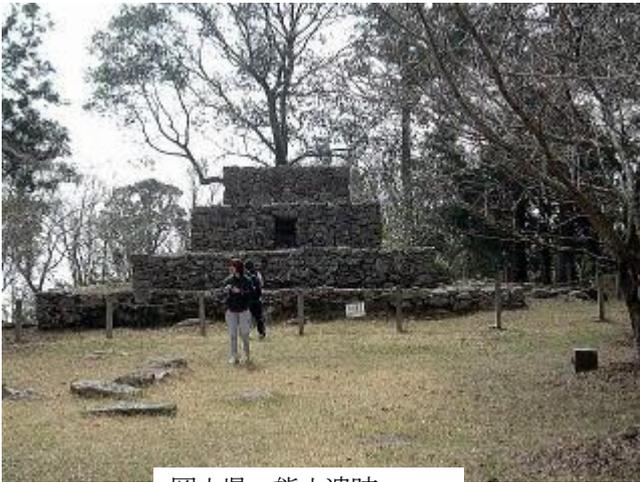


高畑町・頭塔

僧玄昉（げんぼう）の塚との伝承がある。方錐形の土塔で、一辺約24mの基壇に4段築成され、上段は一辺約4mである。格段は石垣状に化粧石が積まれ、平坦部にも石敷きが見られる。格段とも24基の石佛が安置されていたと見られるが、現在は13基が遺存する。土塔は、767年良弁（ろうべん）の命により東大寺造営に手腕を振った僧実忠（じつちゅう）によって作られたことが「東大寺要録」などに記されている。東大寺との関係は深く、土塔の南北中軸線は東大寺伽藍と一致し、また各石仏は東大寺と同じ瓦で葺いた佛龕（ぶつがん）内に安置されていたようである。

石仏は昭和52年重要文化財に指定された。

・岡山県熊山町・熊山遺跡



岡山県 熊山遺跡

吉井側の東側にある熊山山頂（標高508m）の南の峰上に位置する石積遺構である。基壇上に3段に築かれている。基壇、塔身ともに石のみで築かれている。創建年代は出土品から8世紀後半には完成していたとの説がある。

・朝鮮半島の類例

- ・慶尚北道 安東郡 石塔洞；片岩系の割り石を積んで方形の塔身を造る。石積みは5重で、最下段は13m 方形 高さ4.8m 年代他不詳
- ・慶尚北道 義城郡 石塔洞；割り石を積んで方形の塔身を造る。石積みは斜面のため7重～3重で、3重は11m方形。安東郡 石塔洞に比べ積み方は粗雑。
- ・慶尚北道 慶州市 陵旨塔；文武王（668）の火葬の場所に建てた石造基壇を持つ木造建築が火災で全焼した跡地に造営した5重の塔と推定される。

・中国からの影響

上原真人氏は、土塔・頭塔が瓦葺であるから、南方からの影響はありえないとの説。中国の磚塔の影響をうけ、それを低平に表現したものに当たるとみなしている。唐代の磚塔に瓦葺があったことは一般に推定されている。

以上